

アナトール・フランス

——その作品に表われた“Science vulgarisee”——

序

一九〇五年に発表された「白き石の上にて」でアナトール・フランスは一つの未来社会の空想を描いた。この小説の書かれた時期は、ドレフェス事件以後急速に彼の関心を深めるに至った社会主義に對し、彼が最も好意的であった時代であり、この社会主義に關する新知識を、三五〇年後に想定した未来社会に於いて開陳したものである。また、それは、ドレフェス事件の勝利後に書かれたため、非常な樂天的傾向をも示している。だが、彼はその未来国家（ヨーロッパ連邦）に於いて、彼の理解した社会主義を一未来人の口を通して解説させる一方、描写その他に於いて、科学の未来に關し手離しとも言えるばかりに空想をたくましくしたのであった。彼の志向は、社会主義の未来に就いての空想にと殆ど同じ程、科学の未来の想像に向けられたのである。このようにしてアナトール・フランスは科学技術一点張りの世界を描き出したのであった。後にも述べるよう

加藤 林太郎

に、この空想科学小説が、ウエルズに刺戟されて書かれたものであることはほぼ明らかである。また後、オルダス・ハックスレーは、アナトール・フランスと全く逆の意図を以て、類似の未来国家を遙に念入りに作り上げることになる。ウエルズにしろ、ハックスレーにしろ、またアナトール・フランスにしろ、いずれも、現代及び未来の社会に於いて科学の演ずる役割りに非常な興味を覚え、そのため、現代の科学知識を通俗化して作品にとり入れたのである。

アナトール・フランスのこうした科学への空想が、社会主義との接觸によつて解き放たれたものであることはたしかだが、通俗化された自然科学は、事実上アナトール・フランスの創作期間全般に亘つて見受けられるのであり、「白き石の上にて」は、謂わばその集中的な表われであった。前期の懐疑的作品の時代、後期の政治的、諷刺的な作品の時代という風に彼の傾向は変化するが、科学知識も時々於いて性格を変え、また一方、一貫した利用のされ方をも示しながら、常に姿を表わすのである。自然主義、実証主義に反抗的

態度を示すことにより消極的、否定的に、またドレフュス事件以後急速に社会主義と結びつくことにより、いさかか過激に、彼は時代の波の中にあつたのだと言えらるが、科学知識への愛らぬ関心により、この場合ごく自然に時代の性格を示しているように思われる。科学知識の作品への撰取は、勿論彼の独占ではなく、当時の流行の一部であり、彼はこれにより独特なものとなるよりもむしろ平凡なものになるのであるが、彼に於いて支配的な古典的教養の傍らに、いさかかジャーナリスチックな精神も存在したのである。以下に於いて示そうとするのはアナトール・フランスの今述べた様な科学知識への関心であるが、その作品への撰取の方法に於いてこそ現われる彼の特殊性も、同時に示し得ると思ふのである。

(1)

ベルジュレ氏（「現代史」の主人公）が、田舎町での退屈さ、家庭的なわずらわしき、などを歎いた時、願想は段々科学的、宇宙的となり、ついに彼はこうつぶやいた。「新しい永遠が最後に科学と美とを造り出すのを待つより他はない。」⁽¹⁾ 謂わば「科学」という言葉は彼の主人公にとり、何か心を慰め、苦しみを和げるものであり、いさかか黙示録を思わせるようなものでもあつた。こうした、科学への好意的な幻影は、二十世紀になつて他の十九世紀的産物と共に散々輕蔑されることとなるが、こうした幻影は正しく時代の潮流であつた。ルナンは「科学の未来」の序文に於いて、「科学のみが、地球上の人類の不幸な状態を改善し得る」ことを信じてと述べている。美と並べられるに至つたこの「科学」は、正確なイメージとして

は何を意味しているのかははっきりしない。永遠なる未来に、人類が更に理性を發達せしめるということでもあらしく思われる。再ブルナンを引けば、「私の宗教は常に理性の進歩、即ち、科学の進歩ということであつた。」と彼は言うのである。だが一方また、物質的進歩が未来によりよきものを約束しているというのでもあるようだ。だが、この「科学」という言葉が意味し得るもの全てに對し、アナトール・フランスはおゝむね好意的であつた。例えばこれが十八世紀であるならば、「科学」を、ヴォルテールの様に自己の世紀の業績として讃えるか、あるいは啓蒙の強力な武器として甚だ実践的に尊重するかしたであらう。だが、「科学的な」は多少ともにスノビズムに近い形容詞となつて来たのである。科学的なものに對する興味は、時には新しい「女学者」を思わせることさえもあつたのである。

「文學生活」の中で、アナトール・フランスは六十年代を回想して言つてゐる。「当時ダーウインの「種の起源」は我々の聖書であつた。」⁽²⁾ アナトール・フランスも、当時一世を風靡したダーウインの熱心な信徒であつた。ブルジュエの「弟子」を批評した文の中で彼は青年時代を回顧し「ダーウインの本をわきにかかえて」⁽³⁾ しばしば植物園へ行つた頃のこと忘れられないと言つてゐる。博物館見學は敬虔な行事にも似ていた。種々の化石、太古の爬虫類の骨、古代の巨象の背骨、類人猿の骨格などの陳列されてゐる室へ、「私はあたかも聖所へ入る様な気持で入つて行つたものである。」と述べてゐる。「種の起源」の仏訳者ロワイエは長く念頭にどまり、後、胸像の建立運動に彼も一枚加わつてゐる。彼は進化論を一種の運命哲学の如きものと解していたらしいことが指摘されてゐる。

が、多少感傷的な哲学的腹想へ持ち込もうとするのは彼の傾向上必然であった。ダーウインニズムの流行は、しかし、时期的には彼の詩作時代に当っていた。彼の詩「Les poèmes dorés」は科学的と呼はれるべき作品を含んでいることは事実である。「鹿」「欲望」「猿の死」などを生物学的・ダーウィンの詩として挙げるのが出来ようが、「鹿」はおよそ次の様なことが歌われている。二頭の牡鹿が森の中で一頭の牝鹿を争って、夜を通して格闘する。夜明けが近ずき、遂に弱者は敗れて死ぬ。

Enfin l'un des deux cerfs, celui que la nature

Arma trop faiblement pour la lutte future,

Sabat, le ventre ouvert, écumant et sanglant.

(7)

そしてこうした悲惨を歎かず、一つの宿命、一つの法則を見るのだと彼は言うのである。

Telle est la guerre au sein des forêts maternelles.

Qui elle ne trouble point nos seraines prunelles :

Ce cerf vécut et meurt selon de bonnes lois.

「selon de bonnes lois」と結んだのは皮肉でも何でもなく、彼の進化論解釈の楽天性を示すものだが、この様な詩作を「科学的抒情」(lyrisme scientifique)と呼ぶ人もある。強いて言えば、モリエールの作品中に登場するスノップ共が読み上げたとしてもおかしくないようなこれらの作品は、何よりも、アナトール・フランスが、科学的な説明を自己流に撰取しようとする傾向の一端を示すものなのである。

(i) Mannequin d'osier. P.12

(3) Renan: «L'Avenir de la Science», préface. P. K

(3) Ibid. P. VII

(4) Anatole France: «La Vie littéraire», Tome III «Paul

Bourget»

(5) Poèmes dorés. P.191

(11)

彼の批評文集「文学生活」全巻を通じ、アナトール・フランスの科学癖は様々な動機のもとに繰り返し現われて来る。「科学と道徳」「天文学的白昼夢」「大百科辞典」「神秘主義と科学」など、多かれ少なかれ科学上の用語が幅をきかしている。だがその多くに共通の性格は、それら科学上の説明が、懐疑の手段、逆説の方法となっていることである。同時期の「エピキュールの園」は次の様な文句で始まっている。「我々は地球が宇宙の中心であって、他のあらゆる天体はその周りを運行していると信じていた昔の人の精神状態を想像することは困難である。」この同じ章の中に次の如く書かれている。「更にまた、これら数百万の太陽、及び我々の見ることの出来ない数億の太陽は全てが合して、我々の想像も及ばない広大無辺の世界に発生した一動物あるいは微小な昆蟲の血管の中の血液又は淋巴液の一血球に過ぎないかも知れない。」これらはパスカルの用いた比喩を連想させ、その亜流とも考えられそうであるが、パスカ

ルに於けるようなポレミックとしての性格は勿論皆無である。「驚異すべきは、星の世界が廣大無辺であることではなく、人間がそれを測量したことである。」という結論にも論理的な重みは特にかけられてはいないのである。自らは極微小でありながら廣大を測量する、などは実に無害な皮肉にすぎない。だが少くともこうした傾向は「エビキュールの園」を半ば占めているものなのである。「現在我々の眼に達する光は、地球が未だ存在していなかった時に既に空間を進んでいたものなのだ。」という様な事実は、人間の認識力に対する様々な皮肉を語る際、ともかくも実にしばしば援用されるのである。

彼は科学のうちでも天文学を最も好んだらしく思われる。「科学のうちで天文学は最も高貴なもの」である⁵と彼は呼んでいる。冷却して了った太陽がうす暗い空にかゝり、酷寒の地球上で生物が絶滅して行く、というイメージは、殆ど我々の興味を引かないにも拘らず、彼の好みのイメージであった。「ペンギンの島」でドレフェス事件が語られる際、アナートル・フランスらしき人物として登場するピドー・コキューが天文学者であるのも偶然ではないのである。

しかし、彼の作品に於いては、皮肉あるいは懷疑と言つても、作者にとつては、それらを「弄する」ことに興味があるのであり、イメージを用いる楽しみがそこにあるのだと考へねばならない。ミシヨールによれば、こうした傾向は「*imagination créatrice*」を欠いているアナートル・フランスに、その代替物として具わる「*imagination fantaisiste*」だと言うことになる。天文学が皮肉にばかりではなく「*comique*」のためにも用いられていることを見れば、

彼の「*fantaisie*」の性格も理解される。書齋でベルジュレ氏が訪問者である言語学科学生ルー君と話している所へ氏の家庭的憂うつ⁶の張本人であるベルジュレ夫人が入つて来た場面は次の様に述べられている。「ルー君は古びたレザー張りの眩掛椅子の上からフロイントの辞書を取り除けて、ベルジュレ夫人を坐らせた。ベルジュレ氏は壁の方に押しやられた四折判の書物と、その場所にとつて代つたベルジュレ夫人の顔とを代る見較べた。そしてこの二つの実体は、現在非常に相異があり、また外觀、性質、用法の点に於いても非常に異つてはいるが、双方共まだ瓦斯体として原始的な星雲の中に漂つていた長い昔から保つて来た何か知ら根本的な類似をかつては示していたものであるように思われた。

——と言つるのは要するに、と彼は独言ちた。ベルジュレ夫人は無限の歲月の間、酸素と炭素との薄光の中に、無定形無意識なものとして散在し、浮遊していたのであり、同時に、他日このラテン用語辞典を形造るべき分子も、長い年月の間、遂には怪物や、昆蟲や、幾らかの思想などが発生すべき、同じ星雲の中を進行していたのである、不恰好でわずらわしく、双方共に私の若しい生涯の記念物であるこの辞書と妻とが産み出されるためには、非常に長い時日が必要であったのだ。このベルジュレ氏が主人公である「現代史」を読んだ一女性読者はこう言つたそうである。「現代史」は大変面白いけれど、箒の柄に関して形而上学をやるなんて何と変つた癖なんですよ。」ここに彼の作品の「*fantaisie*」の性格が要約されている。このように懷疑的臆想としてであれ、滑稽のためであれ、「エビキュールの園」を中心として「*image fantaisiste*」のために科学は中心的役割を占めているのである。

九十年代に入つてアナトール・フランスは社会批評へと転向を始めるが、既に常套となつていた科学及び科学的イメージも勿論用途を変えて登場するのである。そして生物学、天文学の後を承けて更に地質学が現われる。だがそれも偶然の変化、あるいは好みの変化というよりは主題が社会化して来たことと密接に関連がある。アナトール・フランスが政治批評へ転向した際、その戦争に対する痛烈な諷刺にも拘らず甚だ保守的であつたことがイメージの性格を決定している。

アナトール・フランスの社会批評への転向は、彼が同一の主人公を登場させた二つの作品の間で行われた。陽気な哲学者で快楽的でいささか饒舌でもある神父コワニヤールを主人公とした彼の小説「鳥料理レーヌ・ペドーク亭」に於いては、これまでに見られぬ程批評的になつて来たとは言え、未だ人生批評の範囲を出ていない。

所がその続篇として発表された「ジエローム・コワニヤール師の意見」になると従来から既に脈絡を欠いていた彼の小説の形式は、多くの主題を批評する便宜のため全く破壊され、それはいくつもの章に分けられた対話集となつて了つた。神父は、食事と引きかえに学問を教えてやつてゐる焼鳥屋の息子ジャック・トゥルヌプロシユを引きつれて、様々な種類の人物と議論して廻る。本屋の主人、バスチューから出所したばかりの諷刺文作者、叛乱に失敗し亡命中の英國の政治家、地区の風規委員長、警吏など様々である。この様にして作中の神父はその舞台とする十八世紀の中で一個の啓蒙哲学者とされて了つたのであつた。この中で既に一人の革命家及び一人の諷刺文作者が登場させられ、その浪漫的な社会改革の妄想をやつつけられることになつてゐるのは、後自ら社会主義者と交わり、急進的

な宣伝家となつたことと較べて注意すべき点である。

当時の彼が、無政府主義者も社会主義者も大した区別なしに考えてゐるらしいことは承知せねばならない。当時社会的混乱を惹き起した無政府主義者の爆破事件も、毎年行われるようになったメーデーも、激増の一途をたどつていた各地のストライキも、およそ総括的に受取られていたことが想像される。無政府主義者は余程印象の強かつたものであつて、後年彼が空想的に描く三五〇年後の未来社会にも、なお彼らが横行していることからもそれは判る。要するにこれらの社会的事件の累積が彼に与えた印象は、社会が何らかの変動の前後に來ているのではないかという印象であつた。当時の随想をまとめたものである「エビキニールの園」にしばしばそれがうかがわれる。「今日、多くの人が、我々は文明の最後に到達したということ、及び我々の後で世界は終末するということを信じてゐる。」あるいは「広範な社会的変化が迫つてゐると言われる。予言者達はそれを確信を以て期待し、その到来を既に見たと云うのである。」また、「そうだとすればそれは時代の兆候だ」と我々は絶えず言つてゐる。」などの言葉で始まる章節はすべて社会の変動に対する見解を述べようとしてゐるのである。

しかし当時のアナトール・フランスの努力は、専らこの変動の存在を否定することにあつた。さもなければ変革の希望的幻想を不可能な無意味なものとして否定することであつた。何よりもまず、存在する限りの社会的変化は全て極めて綏慢なものであるという概念は最も好まれ、様々なイメージのものにしばしば繰り返されてゐる。進歩の思想は七〇―八〇年代にはもはや通俗化し、常識化し始めていたため、これを否定することよりも、その速度を制限するこ

とが考えられたのであった。

アナトール・フランスが用いた漸進のイメージにもいくつかあるが、その中に地質学から借りられたものがある。彼が採り上げた或る英国の地質学者の説とされるものは、*「théorie des causes actuelles」*あるいは *「Causes now in Operation」*の理論といわれた。

その説によれば、長い間に地球の表面に起つた変化は、普通考えられるように突如として起る大激変によるものではなくて、徐かな、殆ど気の付かぬ原因の結果によるものであって、それは現在に於いても依然として働いていることが証明されるというのである。「我々の周囲に痕跡を残しているこれらの強烈な変化は、長い時代の結果を遠近短縮したものであるために恐るべきものと思われるに過ぎない。実際はそれらの変化は実に穏かに起つたものである。徐々に何ら激烈な変動なしに大洋の海底は変化し、永河は羊歯におゝわれた平野へ下つて来たのである。同じ様な変化は今我々の眼前でも行われているのだが、我々はほとんどそれに気付かないのである。」そしてアナトール・フランスはこれをケヴィエの説に見られる「突然の驚くべき災禍の連続」に対し、「自然力の緩慢な慈悲深い活動」だと言っているのである。自然科学上の概念を好んで社会に適用しようとするのはフランスに限らず当時の流行であつたと言われるが、彼も勿論その例に洩れない。「この現存原因説を、もし物質の世界から精神の世界へ移すことが出来、且つそれを行動原理の基礎とすることが出来るならば、そのもたらす利益は驚くべきものがあるだろう。」と彼は言う。そして保守的精神と革命的的精神とはそこに調和の地盤を見出すと言っているのである。改変は間断なく行われる時は感ずることも認識することもできないのであるから、変化に反対するものは殊更

抵抗する必要はない。一方革命家は、変化を遂行する力が絶えず働いていることを認識して無鉄砲な行動に出ることはない、というのである。

このいきさかずき、あなたとえによつて彼が述べようとするのは、一種の静寂主義であることは明らかである。これが一個の遊びであることは確かだが、また専ら静穏のみを望ましいと感じている小市民的思考の表われであり、保守的な思考を支えるため様々にあみ出されるイメージの一つと考えるべきであろう。こゝに科学の用語を借りたイメージを更に一つ付け加えると彼はまたこうも言っている。「物理学に於けると同じように心理学にも重力の法則が存在している、絶えず我々を大地に結び付けている。」結局その主眼点とする所は、必然的で規則的かも知れないが、社会の変化は緩漫であるということに尽きる。こうしたイメージは同時代の社会主義者に軽蔑され、「この「緩漫な」という気持のよい言葉は、ひじょうに多くの現代の進化論者の氣に入っている。」という批評を見出すことが出来る。

- (1) Le Jardin d'Epicure. P.1
- (2) *ibid.* P.9
- (3) *ibid.* P.10
- (4) La Vie littéraire (II)
- (5) *ibid.*
- (6) Le Manneguin d'oster. P.11-12
- (7) G. Michaut : Anatole France. P.120
- (8) Le Jardin d'Epicure. P.59-60

(9) *ibid.* P. 114

(10) プレハノーフ「歴史に於ける個人の役割」(西牟田・直野 訳) 八四頁

(三)

ドレフェス事件は、アナトール・フランスを他の多くの作家達と同様、政治活動へ引き出すこととなった。以後彼の死までのほぼ三十年間、彼は甚だ政治的であり、その戦闘的な共和主義は全面的に発揮される。バンダはこうしたアナトール・フランスを「首相コンブの *conseiller quotidien*」になり下つた⁽¹⁾と評するのではあるが。この三十年間のアナトール・フランスを特色づけるのは、社会主義への接近である。彼の社会主義への関心は年を追って深まって行き *« extrême-extrême-gauche »*⁽²⁾と或る種の軽蔑を以てさえ呼ばれるのである。彼のこうした社会主義への接近は、しかし、彼の科学への関心と切り離すことは出来ない。彼が社会主義の中に、徹底した科学主義を見たらしいことは確実である。こゝに於いて社会主義に触れると、論題の自然科学からはそれるし、彼の初期のテーマ及び決定論への興味を述べないのは不十分であるが、社会主義を「科学的」と称する場合彼の行う「統計的」との(或は故意の)混同をとり上げるため、彼の謂わゆる「史的唯物論」にも一応ふれたのである。

「現代史」四巻の中で、アナトール・フランスは、諸人物を彼の関心を引いた順に登場させていったらしく思われる。僧侶、軍人、王党主義者、共和主義者、ユダヤ人、そしてドレフェス事件と共に國

家主義者と社会主義者が登場する。この社会主義者ピソロは、作中、必ずデモの乱闘の中に姿を現わすが、いつも警官に殴られ通しの彼はいきさかペンシズムに陥っている。共和国で共和主義者が殴られるのは情ない現実であるが、更に歎かわしいのは、デモや乱闘をよそに一向動じる様子のない民衆の無気力であると彼は考えている。国民一般の共和的情熱の欠除、及び無気力は「現代史」四巻のテーマの一つとも考えられ、このピソロも、懐疑的な国家主義者レオンも共に、そのテーマの為に登場するのであるが、ピソロはまた、社会主義の方法を説明するために作者により呼び出されているのである。彼の述懐によると、自分は公開の席で喋るようになってから十年になるが、その間ずい分殴られた、民衆の啓蒙と教育はやつと始まったばかりの状態だ。労働者の脳髓は無知で空っぽならいゝのだが、むしろ、そこには、ブルジョワによって長年の間詰め込まれて来た残酷な偏見が詰っていると言うべきだろう。この偏見を追い出して無知の穴を埋めねばならない。それは永い時間を要するが、いつかその仕事は成就するとピソロは言う。何故なら彼は科学的だからである。「これらはすべて科学的で、みんな僕の箱の中に入っている。これらはすべて進化の法則に適っているのだ。」⁽³⁾アナトール・フランスは多少性急に社会主義者のポルトレを描き出そうとし、科学的といふこと具体例を与えるのを急いでいるらしく思われる。「自分は社会学者で、科学的基礎に立って社会主義運動を実践しているのであり、小さな箱の中に、正確に分類した事実の蒐集を所持しており、これによって組織的な革命 *« la révolution méthodique »* を実行することが出来るのだ。」⁽⁴⁾とピソロは言っている。「現代史」の諸人物は主人公をも含めて皆平等に戯画化され

單純化されているため、今述べた統計学の様なものも、滑稽的描述の傾向と見るべきかも知れないが、アナトール・フランスが社会主義者をかゝるものとして考えたらしいことは明らかである。フランスがこの様な点が気に入って社会主義へ接近したというのでは決してない。彼の反権力のための労働者支持、職闘的な共和主義、世界平和主義運動などの点に於いて社会主義と協力しようとするのであるが、彼が世界平和の実現を唱える時にはしばしばある同一の表現が繰り返し用いられる。「しかし、市民諸君、我々は未来に於ける世界の平和を確信するのです。しかも、我々は夢や単なる願望の上に我々の希望を打ち樹てゐるのではありません。それは社会現象全般に対する觀察及び、史的唯物論『materialisme historique』により与えられたデータの⁽⁵⁾上に打ちたてられているのです。」彼は自己の平和主義に確固たる希望を与え、客観的な地盤を保証してくれるものとして、科学性の概念を重んじた様に思われる。アナトール・フランスの用いる『materialisme historique』なる言葉を頭から信じ込む訳には行かないことは勿論である。ルジョンなどは、こうしたアナトール・フランスを「ジョレス先生の優等生」だとあざけている。

だが彼の謂わゆる「史的唯物論」も、単なる受売りにすぎない内容空虚なものと考えては行き過ぎである。彼が実にリフレンの様に繰り返すこの概念にも、彼なりの実体が含まれていると見るのが自然である。

彼が科学上の概念、特に天文学上の事実を逆説、皮肉の一手段として用いようと試みたように、彼の「史的唯物論」もまず第一に、これに類似した皮肉の手段として用いられたと考えねばならない。こ

うした方法は彼独特の手段では勿論ないのだが、彼に於いて特に好まれてゐることは確かである。後になつてハックスレーが彼よりも遙に巧みに科学知識を駆使して同様のことを試みることになる。

彼は「ジエローム・コワニヤールの意見」に於いて戦争と軍隊のために三つの章をあて、諷刺する。人間が動物と共有する鬪争の本能を、名譽で飾り立てたということ、軍隊という集团的無知状態に、人間が一種の安楽を見出すということ、などといった皮肉がいろいろ見出される個所であるが、結びとしてのべられる戦争終滅の希望は、劣らず逆説的なものである。「世界平和の遠い前兆を発見したと私が秘かに喜んでいるのは、軍備が益々さかんになることだ。」とコワニヤールは言っている。「各国民全体がいつかその中に捲き込まれてうたうただろう。そうしたら怪物もあまり養分をとりすぎて亡びるだろう。つまり太りすぎてくたばるのだ。」これは何よりもまず、列強の軍備拡張に対する一つの皮肉に違いないが、この同じ論法によつて、人間の自律的な意志を否定することも容易なのである。人間の意志に反して歴史が実現され得るといふ概念は、天文学的な皮肉にとつて代つた新しい形式による人間の自尊への皮肉である。「いつか世界平和が実現される日が来るだろう。それは人間がより良くなるからではない(そんな希望は許されないのだ)、それは事物の新しい秩序、新しい科学、新しい経済的需要が、人類に平和状態を強制するからなのだ。丁度以前に人類生活の同様の諸条件が人類を戦争状態に置き、今なお戦争状態に維持しているのと同じわけなのだ。」彼が、これを平和主義の演説中で用いたことに注意せねばなるまい。そこに大した悪意のこめられていないことが想像される。世界平和到来の唯物的な必然性ということに、自分の希望へ

の頼もしい支持を見出したと同時に、人間の善意や人間性の進歩などに對するモラリスト的なペシミズムもまた一種の調和的な地盤を与えられたわけである。

日露戦争に於ける日本の意外な勝利は、東洋最初のヨーロッパ的な軍隊によるヨーロッパへの對抗としてアナトール・フランスに一連の逆説を提供したが（「白き石の上にて」）、日本と中国の關係は好個の題材であった。イギリスやアメリカが日露戦争に於いて日本を助けているのは、ロシアを弱くするためであつて、日本を強大な恐るべきものにするためではないから、交戦国のいづれかが決定的な勝利を得るとすることは有り得ない。だが日本が黄色人を白色人に尊敬させることが出来れば、日本は人類のために大きな貢献をしたことになるだろうと登場人物の一人は言っている。何故なら日本の勝利は中国を目覚めさせるだろうからである。「つまり我々は日本が大きくなったら、支那を教育しはしなかつたかと思うのだ。日本が支那に、自分の國を防ぐこと、自國の富を自ら利用することを教へはしなかつたかと思うのだ。日本が支那を強くしはしなかつたかと思つてゐるのだ。」これは当時一般的な見解であり、不安の種でもあつた。新聞雑誌の論調にも類似の見解は見当る。しかし次の様に附けた所が彼の平和主義であつた。「そんなことは一向恐れる必要はないのだ。むしろ全世界の利益のために、そういうことは願わなければならぬ。」日本はかくして、世界平和到来のための希望を担う代表選手の一入ではあるが、その日本の行動に善意や積極的な貢献などを見出さないのは、日本が東洋の一国であるためではないようだ。「日本は人類のために大きな貢献をしたことになるだろう。そして、自分では気づかずに、しかもきつと自分の希望とは反対

に、世界平和の組織を準備することになるだろう。」(10)

こうした平和主義といったような元來真剣なべき問題に、彼に固有の懷疑的皮肉が混入することから、アナトール・フランスの平和主義が道楽半分で冗談事であつたと断定することも出来るし、事実にジョンはそう見ている。だがこれと同様、彼のしばしば唱える社会主義社会の実現もあやしげな皮肉で見られていたのではないかという疑いは理由がある。未來に社会主義社会が実現するのは「それが現在の状態からの必然的繼續であり、資本主義の進化の宿命的な結果であるからだ」ということが確実とは言えないが、可成りの確からしさを以て決定出来るのだ。何となれば正義の勝利を信ずる理由はないのだから。唯物的ということをこのように言いかえたのは彼一流の解釈であつた。反権力主義と平和運動への情熱的な活動とからみ合つて、生來のペシミズムを流し込む組みをも彼は発見したのである。「フランス革命の狂愚は、正義を打ちたてようとしたことにある。」などと唱えるアナトール・フランスにとつて、*« naturalisme historiqne »* はよほど彼のモラリスト的なペシミズムにとり安住の地であつた。ドレフェス事件以後の彼の反権力的、平和主義的な活動に、社会主義が結びついているのを見て、彼の軽卒さ、あるいは逆に彼の装つた熱狂を推測するのも自由であるが、彼の天文学と懷疑主義の關係と同じような自然な結びつき、即ち、彼独特の「科学的なものゝ摂取」が行われていたと考えることも出来る。社会主義者ピソロに「主権は科学にある」といういさか思い切つた断定をさせるのも、「主権の所在は科学にあり、民衆にあるのではない。三千六百万の口によつて繰り返されても愚説は愚説たることをやめない。」といった論法に對する作者の愛着でもある。

- (1) J. Benda : Précision(1990—97) P. 29
- (2) Propos de Georges Sorel (recueillis par J. Vartot) p. 142
- (3) M. Bergeret à Paris P. 168—9
- (4) ibid. P. 167
- (5) Trente ans de vie sociale. II. P. 92
- (6) Les opinions de l'abbé Jérôme Coignard. P. 157—8
- (7) Sur la Pierre blanche P. 202
- (8) ibid. P. 218
- (9) ibid. P. 218
- (10) ibid. P. 218
- (11) ibid. P. 199
- (12) M. Bergeret à Paris P. 168

(四)

社会主義は、しかし、アナトール・フランスをして、現代及び未来の文明の運命が、科学と産業にかゝっていると考えさせる動機となつたようだ。この認識は、彼特有の懐疑的傾向と直接結び付きはしなかったが、この科学と産業の発達を未来の希望とみることに、あるいは全く逆に絶望とみることに風にならば、解することにより、その時々々の自分の精神状態の表現に謂わば駆使したのであった。ドレフェス事件の最終的勝利の時期に書かれた「白き石の上にて」に見られる樂觀的傾向、ドレフェス派の分裂に伴う幻滅と絶望を表明した「ペンギンの島」に於ける悲觀的な傾向に、その事実は

端的に表われている。

彼は既に「エビキールの園」に於いて、「どこかの工業都市を訪問するか鉱山へ行つて見て、貴方がそこで目撃する光景が、最も狂暴な神学者が空想した地獄を遙にしのいでいはいはしないか話して貰いたい。」と述べている。しかし次の様な見解は、社会主義者との接触なくしては述べられなかつたであろう。「各国は皆互に産業戦争をしているのだ。到る所に生産と生産とが武装して睨み合っているのだ。」或はまた「資本主義国家は、封建国家と同様に好戰的な国家なのだ。生産が国家的に行われている現在の制度のもとでは、(…)大砲以外に商業と産業とを調節するものはないのだ。今日の文明世界の經濟条件の最終的な結果は撲滅し合うことなのだ。」見解の視野は非常に広げられたわけである。そしてこの事態を克服せしめるものとして、「労働の合理的な組織化と世界連邦国家の建設」をもたらず善の社会主義を彼が想定する時、アナトール・フランスの「科学主義」は最終的な段階に入る。

彼が未来の社会主義社会を徹底した科学的な社会と見たことは明らかである。「現代史」の主人公ベルジュレが既にそうした想像を表明している。ベルジュレ氏が娘を前にして夢想的に語る未来の社会は「各人が自分の労働の代償を受ける新しい社会」であり、そこでは人間はもはや「それで生きるといふよりもむしろそれによつて死ぬと言つた方がいゝような不正な労働によつて歪められる」こともなく、「工場はもう何百万の人体を蝕むことをやめる」のである。だが一体誰がそうするのか、「多くの人間を粉砕した機械」、「工場で、人体や精神を破砕する兇暴な機械」がそれを成し遂げるのだと言つのである。ベルジュレは言っている。「この解放を私は機械

に期待しているのだ。」(5)

「白き石の上にて」に描かれた未来社会は甚しく科学中心主義であるが、或る朝その国に目覚めた現代人イポリット・デュフレューに対し、未来人モランは、未来国家成立に至る悲惨な闘争の歴史を語り、次の様に結論するのである、「社会主義は、資本と私有財産とが、プロレタリアの努力、更にそれにましまして科学と産業との新しい発達とによつて事実上殆ど破壊されて了つてからでなければ、この二種の富を廃止することは出来なかつたでしょう。」このようにアナートル・フランスにあつて、科学、産業、機械などは必然的によきものを生み出す存在、「science bienfaitrice」とでも呼ぶべき善意ある存在と考えられ勝ちであつた。

未来人モランが、自分達の社会に就いて「我々は生活を全ての人々にどうにか我慢のできるようにしたのです。我々の子孫がもつとよくして行くでしょう。我々の組織は不変のものではないのです。」とおよそ控え目へのべたのは、「楽天的な計画なしに」描いたというフランスの主張によるものであろう。だが、「現在行われている大規模な國営事業を研究すれば、将来の社会主義的生産方法に就いて何らかの観念をつくることができる。」と称するフランスの、これは三五〇年後の空想であるから、産業と科学の方は殆ど手離しで空想されていると考えてよいようだ。

明朝は九時に起してくれと下男に言いつけて自室で眠りについたイポリット・デュフレューは、全く見知らぬ場所、「前から知つてゐるものは太陽だけ」という様な未知の国に目覚めたのである。掲示板には航空機の時間表と気流図とが掲げてあり、人気がない地上は、空を過ぎる航空機の影ばかりが動いている。工場は々々光線、

の利用によりオートメ化されている。しかも案内者は「これは旧式なのだ」と説明する。国境は科学的に防禦されている。「連邦の周囲は電雷帯でとりまかれていますので、そして小さい人間が一人双眼鏡を眼にあて、どこかに備えつけてある鍵盤の前に坐つてゐるのです。これが我々の唯一人の兵隊です。この男が指先でちよつとキイを押せば、五十万の軍隊が粉微塵になつて了うのです。そしてこれらは Lyons Y による操作だと説明される。各人はめいめい電気護身機を携帯しているため犯罪の怖れはない。イポリット・デュフレューが偶然知り合つた女性に職業をたずねられ、出まかせに電気学者だと答えると、当の相手が婦人電気学者であつたため驚く、といつた場面まで現われる。化学者は固形食料の研究を進めるべきか、或は腸を切りとつて遺伝により腸をなくすべきかの問題ととり組み、歴史学者は専ら統計に忙しい。音楽・絵画・彫刻は隆盛を極め、記念門の上には、「種時く人」と「刈取る人」の二人の巨人の銅像が眩をついているが、一方活版の書籍は姿を消し、書物は専らフォノグラフィに取つて代らされている。要するに「国家が化学者の欲心を求めて、他の労働者を犠牲にする」という非難さえある程、科学一点張り、学者優遇の社会なのである。科学者は美事な邸宅に住み、最高級の航空機を乗り廻している。

こうした未来社会を空想した際、ウエルズが念頭にあつたことは間違いない。事実、作中、古今の未来空想文学中でウエルズは独特のものだと評されている。ウエルズはフランスの「白き石の上にて」が発表される迄に既に *The Time Machine* (1895), *The Invisible Man* (1897), *The War of the Worlds* (1898), *When the Sleeper Wakes* (1899), *The First Men in the Moon* (1901)

を発表し、「白き石の上にて」と同年一九〇五年には、*A Modern Utopia* を発表した。フランスの「白き石の上にて」はこうしたウエルズの作品のエピゴーンであるとも考えられるが、ともかく彼は、未来の「社会主義」社会をかゝるものとして想像したのであった。我々はそこに強いて戲画的要素を求めする必要はないようだ。

- (1) *Le Jardin d' Epicure*, P. 237
- (2) *Sur la Pierre blanche*, P. 215—6
- (3) *ibid.*, P. 238
- (4) *M. Bergeret à Paris*, P. 249
- (5) *Sur la Pierre blanche*, P. 283
- (6) *ibid.*, P. 306
- (7) *ibid.*, P. 307

(五)

いろいろな形式を以て現われる種々の反戦論を分類した中で、ヴェルテールと共にアナトールフランスを「愚弄型反戦論」と呼んだ人がある。そして「カンディード」と並んで「ペンギンの島」がその代表的なものとして挙げられている。「ペンギンの島」が全篇諷刺と愚弄で満されていることはたしかである。半盲の聖マエールにより誤って洗礼をさづけられたペンギンが、洗礼の形式的価値を尊重する必要から人間に変えられるという話を以て始まるこの小説は、彼が非常に愛したキリスト教伝説、聖者伝を戯画化することか

ら始めて、原始社会の迷信、宗教や私有財産や国家の起源、封建制の勃興、ブルジョワ革命、近代民主主義、更にブーランジエ事件やドレフェス事件などの現代の出来事を徹底的に戯画化し諷刺している。この小説の結末の「未来社会」には、しかし、「白き石の上にて」の樂觀主義は跡かたもない。「いかなる高層建築も人々を満足させるに至らなかつた。(…)そして一方ますます地下を掘り進んで行った。」と彼は物語る。「千五百万の人々がこの巨大な都市の中で労働に従事していた。」資本主義と機械文明の上に築かれた人間の蟻塚には、金銭の追究以外には何の分別もない人々が働くようになる。この巨大な都市も最後には少数の理想主義的なアナキストによる組織的爆破により破壊され、近代文明は終りを告げる。後には野暮と未開の時代が続く。何世紀か過ぎ、粗野な獵師は都市の廢墟を見下す岡の上で熊狩りをやる。更に何世紀か過ぎて遊牧民や羊飼いや農夫が代る代る生活する。遂に散在する村落は都市に成長し、諸都市は合一して首都を形成する。やがて「いかなる高層建築も人々を満足させるに足らなかつた。(…)千五百万の人々がこの巨大な都市の中で働いていた。」こうして「ペンギンの島」は終り、絶望的な無限の循環が暗示されている。

アナトール・フランスの科学文明の未来に対する絶望的な空想はこの様なものであつた。「この都市は亡びねばならない」という主張のもとに、この文明社会の終末をもたらすアナキストの爆破活動は九頁に亘つて詳しく述べられているが、フランスが、科学の最終的な暴力をアナキストの手にゆだねたことに注意したい。フランスにとってアナキストは非常に印象的な存在であつたと想像される。彼が社会批評に転ずる直前、一連の爆破事件が恐怖を生み出

したことは以前にふれたが、大戦直前に発表された「天使の叛逆」も、失墜天使の天国への叛逆という名のもとにアナーキストの群が描かれる。そして彼らもまた、製造蓄積に専心した新兵器 *select-trophane's* の集中攻撃により、天国へ勝利者として帰還する。「白き石の上にて」で描かれた未来社会に於いても、未だにアナーキストが横行する程であつて、アナートル・フランスにとり、無政府主義者は非常に現実的な存在であつた。実際、フランスは無政府主義者の爆破事件の思い出をもつていたのであり、あながち妄想とはかりは言えないのであるが、時代を下つたバンドに於いても、科学の暴力はアナーキストの手中にある。「科学の生み出す未来の結果のうちには、思慮浅い人間の手に渡れば、人類を破滅させて了うかも知れぬものがいくつもあるということ、この事実を認めねばならぬとしても私は別に驚きはしないだろう。」と言ひ、その例として、「例えば、原子の核分裂が、無政府主義者の手によつて、この地球を吹き飛ばすことだつてあるのだ。」と迷べている。

個人的にせよ、組織的にせよ、理想主義者、あるいは叛逆者などと言つた秩序への反抗者を、科学の最終的な暴力の行使者とする想像は、二度の大戦を経た今日では一個の妄想にすぎないであろう。むしろ科学の暴力は秩序の代表者により秩序回復のために整然と行使されたのであつた。反抗者の手により科学が世界を破壊すると考へるのは既に絶望的な空想ではあるが、これさえも前時代的なオプティミズムを感じさせはしないか。ハックスレーは次の様に言つてゐる。「過去五〇年ばかりの間に、科学と技術は、様々な国家主義的國家の主権者達に、圧制政治のための、これまでに類を見ない有効な道具を提供した。戦車、火焰放射器、爆撃機—これらはそうした道

具のほんの一部だが—などは、民衆反抗のかつての古いテクニクを無意味なものにしてつた。⁽³⁾一八四八年ならば、猟銃は兵隊のもつマスケット、小銃に對抗できたし、ひつくりかえした荷車や土糞や積み上げた鋪石は騎兵の突撃や先ごめの大砲などに対する防禦物たり得たのもあつた。だが「その後百年間の科学技術の進歩により反抗した民衆の手に渡る武器などは、少数支配者の手中にある兵器廠に對抗すべくもない。」⁽⁴⁾科学の発達が「武器の発達」という言葉で置き換えて考えられる時、人間が造り出し、従つて必然的に人間に對して専ら有益であると考えられ勝ちな科学及び科学技術に對する一つの逆説が生れる。これが逆説として成り立つためには人間にとり有益な科学という執拗な幻想が存在するのであるが、一方逆説の方も古くより頑強に繰り返されて来たのである。ハックスレーの評論の表題である「科学・自由・平和」という三つの言葉はオプティミズムの糸により結ぶことも出来れば、その反對にペシミズムにより結び合わすことも出来るのである。彼の評論が後者に属するものであり、逆説である時、表題は現存する強力な信仰の名前なのである。そしてこの信仰の生れると殆ど同時に逆説の方も誕生したものと考えられる。モンテスキューは「ペルシャ人の手紙」の人物に西欧世界での科学の発達を語らせて次の様にのべている。

「科学より得られる利益が、この様に毎日人間の行つてゐるその悪用をよく償ひ得るかどうかは疑わしいと私は考へてゐる。砲弾が発明されただけで、西欧全国民の自由が奪い去られるに至つたと私は聞いている。砲弾の最初の一発で降伏して了う様な市民達に國防を委ねておくわけには行かなくなつたので、王侯達は、これをいゝ口実にして訓練を積んだ兵隊の大軍団を擁することになつたし、次い

でこれらの軍団をもって臣民を弾圧するのだ。

火薬の発明以来、不落の陣地などといったものはなくなつたではないか。不正と暴力を逃れるための避難所は、もはやこの地上にはなくなつたわけだ。」

アナトール・フランスも、その希望的な科学観の一方に於いて、やはりこの逆説の伝統に立っていないわけではない。中国を西歐植民政策の餌食たらしめたのが、西歐の進んだ科学及び軍事技術であり、日本を西歐にとり意外な反抗者たらしめたのも、この同じ西洋の科学及び軍事技術であることは「白き石の上にて」で述べられる所である。「所で、あらゆる植民地戦争の根本原則は、ヨーロッパの国民が相手の国民よりもすぐれていねばならぬということなのだ。そうでなければ、その戦争はもはや植民地戦争とは言えないのだ。これは一目瞭然たることだ。こうした種類の戦争ではヨーロッパ人は砲兵隊で攻撃し、アジア人あるいはアフリカ人は矢や棍棒や投槍やトマホークで防ぐがよいということになっている。尤も火繩銃だとか旧式の弾薬入れ位はもつてもいいことになっているが、このことはますます植民ということの名誉を増大させるのだ。しかし如何なる場合でも植民地戦争の相手国がヨーロッパの武器をもつたり、ヨーロッパ式の訓練を受けていることは許されないのだ。その艦隊はジャンクや丸木舟や木の幹をくり抜いた小舟でできていなければならぬのだ。ヨーロッパの船主から船をいくらか買い込んだところで、これらはじきに使えなくなる代物だ。武器庫に瀬戸物で造つた砲弾を備えつけている支那人は植民地戦争の規則に則つてゐるわけだ。ところが日本人はこれを逸脱しているのだ。」⁽⁵⁾アナトール・フランスに於いても、科学・自由・平和の三語が全く樂天的に結

び付いているとは到底考えられない。だが、この同じ「白き石の上にて」に於いて、人間に対する好意に満ちた科学、専らその有益性のみが引き出されるべき科学の未来を空想している点、甚だ樂天的であるし、また一方絶望的な見解の極に於いても、科学の力を借りた大規模な破壊の実行者をアナキストなどの反抗者の中に求めるところに彼の絶望的空想の限界を見るべきであろう。「白き石の上にて」の未來社会で、有益な科学を国家の管理のもとにあるものとして描きはしたが、その暴力もまた国家の手にあるものとは考えなかつたのであろうか。「パリの鋪石をあれほどしばしば掘り起したフランス人のエネルギー」をなつかしんだアナトール・フランスは、ひとにぎりの反抗者に最新鋭の科学兵器を一方的に与えることにより、ノスタルジックであると共にオプチミスティックでもあつたと言えるであらう。

- (1) L'Île des Pingouins. P.415
- (2) Julien Benda : Précision (1930—37). P59.
- (3) Aldous Huxley : Science, Liberty and Peace. P.6.
- (4) ibid. P.7
- (5) Montesquieu : Lettres Persanes. P.123 (Hachette)
- (6) Sur la Pierre blanche. P.208—9

結 ぶ

アナトール・フランスの懷疑的時代と政治的時代とを問わず、

科学は常に関心の一部を根強く占めていたということは言えると思う。「人類の知識の範圍は過去五〇〇年の間に驚異的に広がった。」とはフランスが「文学生活」第二巻でのべる科学発達への讃辞だが、この言葉は十九世紀の初頭以来今日に至るまでの何時の時代の人が発したとしてもおかしくない言葉である。現にハックスレーも一九四七年に、逆の意味を以て全く同じことを言ったのである。全てのことに関心をもち、百科辞典的な精神を有するアナトール・フランスが、この科学に興味を寄せ続けたのは謂わば当然のことであるかも知れない。

彼の懷疑主義から楽天主義への精神上の推移は、彼の「科学」的表現の上にも、可成り明瞭に表われている。また彼の「科学」は、懷疑的表現に用いられた文学上の手段から、政治的主張の支えとして用いられる思想的、政治的な手段へと変化して行った。たゞ科学もまた、常に軽い皮肉の様相を帯び勝ちである点に、性格の一貫性が示されているのである。この様に科学は科学本来の目的を離れ、謂わば通俗化され、文学化されてアナトール・フランスの作品中に現われる。

だが、彼は科学の広い範圍を通俗化して扱える幸運な時代にあつたとも言ふべきであろう。通俗化を行う者も、今日では、自ら一科学分野の専門家である必要があるだろう。アナトール・フランスよりも遙に巧妙に科学を文学・批評の中へ持ち込んだオルダス・ハックスレーは「見事な新世界」などでも判る通り、その駆使する領域は生理学と心理学に限られていると言つてもよい。このことは、彼がかつて医学志望であつたことのみによつて説明されるのではない。だが、アナトール・フランスは、彼の時代の幸運な事態を十全

に利用したと言ふべきであろう。彼の「ダーウィニズム」は、いさゝか詩的・哲学的に歪められているし、彼の「社会主義」も、多少科学ユートピア的な所があるようだ。それにも拘らず彼はダーウィニストであり得たし、ソシアリストでもあり得た。彼が科学へ関心を寄せれば寄せるほど彼の非科学的なひずみは目立ち、科学の正しい理解者であつたというには程遠いことは認めねばならぬが、科学礼讃の時代にあつて彼も一人の、時にはスノップでさえある科学愛好者であつたということは言えるのではないだろうか。